今月のテーマ：女医が活躍できる社会

育児中でも第一線で働けるような選択肢が必要

——お二人とも、子育てをしながら、女医として第一線で活躍されていますが、今までを簡単にお聞かせ願えればと思います。

坂根　私や島田先生は、男女雇用機会均等法第一期世代で、女性も一生、第一線のキャリアを維持しようとする風潮が強い世代です。それでも、私たちが医師になったころは、女医は採用しないと公言していた医療機関も少なくなかったので、そういう意味では医療界に、他業界に比べてかなり遅れているといってもよいでしょう。実際、私が第二子を妊娠した当時、勤務していた病院では、女医の社員第一号でした。

もちみに、女医のパートナーは、約7割が同じ医師といわれています。夫も大学病院の勤務医でしたから、24時間365日休みなしの状況で、当然、子育てのサポートを期待することはできませんでした。

私の子どもは二姉妹ですから、出産条件はさまざまな医療機関で、宿直回のパート、当直パートを掛け持ち、その次は月数で宿直は免除、常勤でオンコールは免除で、子育ての過程に応じてさまざまな働き方をしてきました。もちろん、意欲で乗きた気持ちにありましたが、しかし、育児中はスタッフのシフトが組まれれば、私が当番とする宿直当直科では事実上常勤とほぼ同じ扱いでした。勤務医に、現在でも基本的に常勤なら365日24時間対応できることが原則ですから、私や夫の両親の手伝いはあまり望めなかったので、ほとんど私が仕事の調整をしながら子育てをしていました。

今になって反省しているのは、子どもが小さいうちは、本当に楽しかったこと、心から子育てを楽しめなかったこと、当時の写真を見ながら、「もっとキスしてハグすればよかった」と後悔しています。

島田　私の主人は医師ではなく、一般企業に勤務するサラリーマンですが、出張や単身赴任が多いため、「家にいてくれるだけでも援護」という環境でした。私の親も遠方で、頼れなかったので、子育てのサポートが望めないというのは、ほぼ坂根先生と同じでしたね。

私は母が一人いますが、祝女を結婚した当時勤務していた東京逓信病院には、院内保育園があり、結婚中からこのような預け先を確保できる環境にあったのはとても恵まれていたと思います。しかし、そもそも院内保育園を使用していたのは看護師のみで、女医は私が第一号。女医は妊娠・出産を前提に退職してしまうというのが、当時は当たり前の風潮だったのです。

私は2000年ごろからコンタクトレンズ運動を始めましたが、家族で参加するようなイベントも多く、娘が小さいうちはできるだけ一緒に行くようにしていました。そのせいか、今は娘もこの活動に非常に興味を持ってくれているので、うれしいですね。物理的に連れていくのが難しい場合もしばしばあり、せっかくの休日なのに母親がいないことで寂しい思いもさせたのではないかと思っています。

——女医が増えていますが、子育ても勤務環境はあまり変わっていないのでしょうか。

坂根　みほどのべたように勤務医は共働なら、現在でも基本的に24時間365日対応が原則です。また、勤務医は任意のアルバイト手当（PCL）がいわゆる社用の分野なのですが、私が子育てから復帰後にPCLを拒否して24時、筑波大学で「最新」ミュンもがいる女医がかなりいるように思います。

坂根・みち子　1985年、東京大学医学部卒業後、同大学医学部附属病院、東京逓信病院、みね記念会病院、聖路加国際病院ブリンクス・ジャパン、ピンク・ブルーブルのクリニックを経て、2004年、東京都渋谷区に開業。日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本産科婦人科学会倫理委員会委員、日本産科婦人科学会代議員、日本産婦人科学会理事